

ちょっと ブレイクしませんか?

モダン・タイムス [1936年]

第 12 回

イソップ寓話集に「二つの道」と題する小話がある。「その昔、ゼウスの命令により、プロメテウスは人間に二つの道を示した。自由の道と奴隷の道だ。自由の道は、初めはごつごつとして抜け出るのもむつかしく、切り立って水場とてなく、棘だらけで危険がいっぱいだが、最後にはうち開け、散歩道や森の木の葉や湧き水にあふれ、辛酸の後の願いに至るようになっている。一方、奴隷の道は、初めは広く平坦で、花咲き乱れ、目や口を楽しませるものにあふれているが、最後には抜け出すのもむつかしい険しい崖道になるのだ」

「モダン・タイムス」(1936年)は、大量生産システムに対するチャップリンの鋭い皮肉が満載されている。大工場で職工をしていたチャーリーは毎日単調な仕事を繰り返している内に、とうとう気が変になってしまう。解雇され、街を彷徨っていると暴動に捲かれて、彼は首謀者と見なされて投獄されてしまう。だが、無罪放免となる。チャーリーは造船所で職を得たが、慣れない仕事でまたまた解雇される。ふとチャーリーは飢えた不良少女が食物を盗んで警官に捕ったのを見た。彼は直ぐ無銭飲食をして警察へ引立てられた。牢へ送られる途中でチャーリーは少女と顔を合わせる。二人は示し合わして逃亡した。それからこの二人はどんなことがあっても別れない仲となった。チャーリーは百貨店の夜警に雇われた。やっと好きな仕事を見付けたと喜んだのも束の間、最初の晩に散々泥棒に荒らされ、彼も嫌疑を受けて投獄された。出て来ると少女はキャバレーの踊り子になっていた。彼女の推薦でその店で給仕をして歌うことになり、二人とも非常な成功をした。ところがそこへある日現れた客はかつて少女を感化院へ入れようと探していた若い役人だった。チャーリーは娘を連れて逃げ出し、二人並んで浮浪の旅に出るのだった。

現代人は生きるために働かなくてははいけませんが、働くとは生産管理や生産システムに縛られる。奴隷的ともいえる生き方でそこには自由はない。一方、自由を享受すれば、ノルマやストレスからは解放されるが、生きる糧を失う。本作品で需要が高まってラインのスピードを上げるように社長が指令する場面は、映画「ベン・ハー」の中での海戦場面で、奴隷に櫓を漕ぐ速度を上げさせる場面と同じだった。ラテン系では、家電製品などが故障すると、修理されて戻ってくるまでに1か月もかかったという。なんとも悠長な話だが、リペアーするエンジニアにある程度の裁量があると、ストレスもいくらか軽減される。働くことは人生を豊かにするためにあるのだが、欧米人とわが国では、人生観や労働観も違いがあるようだ。「モダン・タイムス」が80年近く経っても、今なお新鮮なのは現代でも自由の道と奴隷の道という二つの道の矛盾が脈々と生きているからだ。

精神科医・映画評論家

かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授

